錯覚した小宇宙

——Our faith comes in moments;

青空文庫

our vice is habitual. ——Emerson.

辻潤

人体が一個の「小宇宙（ミクロコスモス）」であるという思想は別段珍らしい考え方ではない。禅家では芥子粒の中に須弥山さえ入っている。これは比喩だが、電子の中にひょっとしたら全宇宙が包まれているのかも知れないのだ。

自分は少年の時分からひどく空想癖が強く勿論、妖怪変化の類が好きだった。長ずるに及んで神秘家になったところで別段不思議ではあるまい。しかし、なぜ自分がロマンチケルであるかということは説明のしようもない。

自分は近頃では益々理論というものの如何に無価値なものであるかを痛切にかんじるようになって来た。但し、麻雀が好きだという位な意味で理論を弄ぶことの好きな人達を別段咎めようとは思わない。世に真理というような固定したもののあることを信じている人程、気の毒な人達はないと考えている。現代の多くの狂信的マテリヤリストは原始基督教徒と一向変りがない。かれ等の中には立派な殉難者が沢山にいる。

畏友古谷栄一君はかつて「人間の自我は錯覚」という説を発表した。自分はその説に大に推服しているものである。簡単に結論だけをいうと——人間つまり一人の個人は形而上的には一人でも二人でもなく、恰かも水のように流動して融通無碍だというのである。唯その流動が永い間の惰性によって一点を中心として緊縮されているに過ぎないというのである。故に「死によらずんば之等の何千万年の惰性を打砕して本然の微分流動に放化し、散却することが出来ぬ」が一度心眼を開いて黙想するならこの縦鼻横目の活人そのまま彼を微分流動の中に放って考えることが出来る。要するに一の個人は只彼を中心として全宇宙の流動循環が浪打ち来るその一切の力の尖端に於ける全宇宙の一表現、一仮現に過ぎぬ。それ故——個人はそのままで全宇宙である。

勿論、どうして惰性のために「自称」が出来あがったのだかということは不明なのである。しかし、所謂、普通に「自己」と称している、またそれをさも重大な意義ででもあるかの如く振りまわしている輩の如何にくだらないかは大方の経験によって分明である。

自分は夙（つと）に人生を左程有意義に考えてはいず、人間の生活を寧ろ悲惨で滑稽なものだと考えているのである。勿論、自分達の生活をもひっくるめての話である。どうしてもこんな不合理で馬鹿々々しい生活はあったものじゃないと思う。しかし、どうもこれが今始まったのではなく何千万年か続いているらしいのには恐縮しているのである。全体、如何なるそこに道理があるのであろうなどと考えても、せいぜい聖書の創世紀でも信ずるよりほか名案も浮んでは来ない。

一度理性を働かして物を考えると、自分は忽ち懐疑派になる。これはひどく逆説じみてきこえるかも知れないが、自分が心霊というような物の存在を信ぜざるを得ないのは自分が如何にスケプチックであるかという証拠なのである。自分に解らないものを全部否定する勇気のある人の如何に幼稚で無邪気であるかを私は嗤わざるを得ない。自分にはアインシュタインの「相対性原理」という説が勿論よくわかってはいないが、わからないからといって彼の説が誤謬で

あるなどといえた義理ではない。

古谷式の個人即宇宙説からいっても人間は誰でも霊媒になる位な可能性はもっている筈である。しかし、エレメントの結合は森羅万象と共に無限に複雑しているから、「可能性」はあるが、やはりそこには特別な「天才」が存在しているわけである。普通人の聴覚とベイトウベンの聴覚とを同一視するわけにはいかないのである。犬や猫は恐らく人間の所有していない遥かに微妙な嗅覚を持っているに相違ない。

禅家では無念無想というようなことを常套語に使用しているが、やはり一種のトランス状態に没入した意味だと自分は考えている。そこになにか普通とは異なった心的現象が現われて「悟得」することになるのであろう。問答も常識的に考えると人を馬鹿にした洒落の交換とも思われるが、やはり一種のテレパシイが行なわれるのだと自分は信じている。由来、直覚は天才に付き物ではあるが、これを昔から「霊感」といったのはまことに当を得た言葉だと思っている。偉大なる科学者のすべての大発見や発明も単なる理性の働きによっては決してとげられなかったに相違ない。

自分は近頃、自分の生まれた「日本」という郷土に生息している「日本人」の正体をハッキリ把んで見たい欲望にかられている。ほんとうにハッキリした「国民性」というようなものがあるかどうか、あれば、それは実際どんな風なものなのであるか、等々に就いてである。勿論、ひどい雑種であることだけはわかっている。それがどの位な程度の雑種なのであるか、しかし、国も狭いし、随分長年の間他国ともあまり交際せず、相互の血液はかなりな程度まで濃厚に融合している筈であるから、自ずから別種の「国民性」が出来あがっているわけである。しかも、それが外国特に欧米の影響を苦もなく受け入れて、忽ちその思想や生活までかれ等の模倣をするに至ってはよほど独創性の缺如した「国民性」だと見える。自分は今日の十中八九までの日本の不幸な現状は所請欧米の文明を盲目滅法に模倣した結果だと考えている。今に至ってはとうてい挽回の道もなさそうだが、一応忠告だけはして置きたい。

話が岐路に亙ったが、自分は一般の日本人のあまりに常識的なのを軽蔑したいのである。これには儒教（孔子の説に非ず）の影響が多分に底流になっていることと思うが、英米の所謂ブルジョアジイの似非（えせ）偽善的な紳士道徳の影響もかなり混っていることであろう。一言にしていえば功利的でケチ臭く、俗悪にして下卑ている――このブルジョアジイから物質的な富を剥奪してしまうと逆にプロレタリアートが現われて来る。いずれも下等なマテリアリストで、所謂駱駝が針のメドを通るより、もっとむずかしい手合いである。

人生――もっと広くいえば我々の目睹（もくと）する現象界はこのままでは到底解釈は不可能である。心霊界があると信ずる方が理窟に合っている。一概に空想とか迷信とかいうが、全然根拠のないものからはなにも生まれては来ない。普通の官能を標準にしてすべてを解釈することはまったく浅薄にしてとるに足りない。一滴の水の中に蠢動するアミーバにはアミーバの世界しかわからないと同様、人間を万物の霊長などと自惚れたら、もうなにもかもわからなくなってしまうであろう。

元来、科学というものは現象界の法則や、作用を説明するものだが、それが一定不変であるとはどうしても信じられない。人間の知力の変化に伴ってどんな風になるか計り知られないのだ。だから絶

対不動の真埋などは到底今のところでは考えられない。だから、自分はいつでも半信半疑だ。幽霊を見たという人は多分見たのだと自分は信じている。頭からそんな馬鹿なことはないなどとはいわない。極端にいえば我々の眼に映じている現象は全部錯覚であるかも知れないのだ。猫の見るアポロの像と、われわれの見るアポロの像とがまったく同一だとは到底信じられない。これは階級闘争の理窟にも応用出来る。僕は階級闘争などという生ぬるい説はきらいだ。闘争という方面から見れば男女はいうまでもなく生物の各自がみなそれぞれなん等かの意味で闘争しているのだ。生きているということは搾取していることである。唯その程度に千差万別のちがいがあるばかりだ。此処まで押し詰めると理窟はなくなってしまうらしい。

心霊問題の研究が必要か否かというような質問はある意味で愚問だともいえる。必要でないといえば、みんな不必要だし、必要だといえば一つとして必要でないものはない。だからその方面に趣味をもってやりたい人は大いにやった方がいいと思う。学問は道楽で、茶や、麻雀をやるのと大差はない。生産、生産とうるさくいう人達がいるが、そんなことは始めから問題にもならん屁理窟である。しかし、若し人間がみんな労働をしないでも、安楽に生きてゆく方法さえあればそんなことはまことにどうでもいいことになってしまうのだ。遊んでなるべく楽をしたいという本能が人間にある間は、だがいくら朝から晩まで汗水を滴らして働け働けといったって無理な理窟である。そんなことを口でいう奴に限って、自分は一向働いていない連中が多い。

ダダイズムという名称は今では既に黴が生えて場末の古道具屋の片隅に転がっている化物だが、自分のいわんと欲した意味は一般世間からは甚だしく誤解されたし、現に今でも依然として誤解されている。

自分がダダといった意味は、自分のミクロコスモス的自覚に名づけた名称にすぎない。自分はコスモポリタンであるが故に、真の愛国者である。偶像破壊者であるが故に、デイストである。自分は出来るだけ融通無碍でありたいのだ。しかし、自分は限られている存在だから、決してアブソリュートではあり得ない。

マルキシズムや唯物思想や、アメリカニズムや、大衆や、エログロや、その他一般に喧々囂々として附和雷同する街頭の流行論に附随して僕などが今更チンドン屋の旗持の一人になる必要は毫もない。自分は自分の「個」をあくまで掘って、自分でなければいえないようなことをいって見たいと欲している。読者は僕の支離滅裂な理論の矛盾に躓かないようにしてもらいたい。

青空文庫情報

底本：「辻潤著作集2　癡人の独語」オリオン出版社
　　1970（昭和45）年1月30日初版発行
※表現のおかしい箇所は、「辻潤選集　玉川新明編」五月書房、1981（昭和56）年10月11日初版を参照して訂正した。
入力：et.vi.of nothing
校正：et.vi.of nothing
1999年1月24日公開
1999年9月6日修正
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

錯覚した小宇宙

——Our faith comes in moments;

2026年10月1日　第二版

奥　付

発行　　青空文庫

URL　　http://www.aozora.gr.jp/
E-Mail　　info@aozora.gr.jp

作成　　青空ヘルパー　　赤鬼@BFSU
URL　　https://aohelp.club/
BiliBili　　https://space.bilibili.com/10060483

Special Thanks
　青空文庫　威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー http://aohelp.club/
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
http://tokimi.sylphid.jp/